

仙台二中 防災だより

第10号

令和5年度 第10号
令和5年11月7日発行


発行者 防災主任

11月5日は「津波防災の日」

11月5日は、東日本大震災発生後の2011年に法律で制定された「津波防災の日」であり、2015年には国連総会でも「世界津波の日」に制定されました。11月2日には仙台市内においても沿岸部の学校や地域、企業などが参加する防災訓練が実施されました。

もし津波警報や注意報などが発令されたら

沿岸部や川沿いにいたら、とにかく速やかに海や川から離れ、高台や避難ビルなど安全な場所に逃げ、命を守りましょう！津波警報が出た場合の対応や津波への備えについて分かりやすくイラストで説明されたものがありましたので、御紹介します。

大津波警報	予想される高さが3mを超える	沿岸部や川沿いにいる人はただちに高台や避難ビルなど安全な場所に避難
津波警報	予想される高さが1m～3m	
津波注意報	予想される高さが0.2m～1m	海の中にいる人はただちに海から上がり海岸から離れる



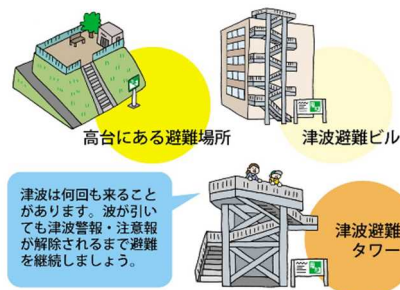
津波への備え



ハザードマップで、自宅だけでなくよく行く場所や通学路などの、津波の浸水想定を知っておく



避難場所を確認しておくとともに避難経路を実際に歩いてみて危険箇所を確認



村人を救った「稲むらの火」の物語

旧暦の1854年11月5日に発生した安政東海地震の際に村人を津波から救った和歌山県広川町の実業家、濱口梧陵(はまぐち・ごりょう)さんがモデルの「稲むらの火」の物語にちなんでいます。村の高台に住む庄屋の五兵衛は、地震の揺れを感じたあと、海水が沖合へ引いていくのを見て津波の襲来に気づき、祭の準備をいている村人たちに危険を知らせるため、高台に建つ神社近くで刈り取ったばかりの積み上げられた稲の束(稲むら)に火をつけました。それを火事と思い消火のため高台に集まった村人たちの眼下で津波は猛威を奮い、暗闇のなか村人たちはその火を頼りに逃げ、津波から守られたという話です。小泉八雲(ラフカディオ・ハーン)がこの逸話をもとに「A Living God」という小説で海外に紹介しています(関連サイト:稲むらの火の館ホームページ)。

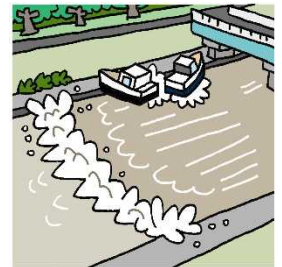


関連サイト
「稲むらの火」

未来を拓くために

2011年の東日本大震災で亡くなった方のうち約90%は津波が原因と推定されています。将来にわたって津波の犠牲者が極力出ないための様々な取組として、震災遺構の見学や被災された語り部の話を聞くことが挙げられます。

本校の2・3年生が1年生の時に校外学習で訪れた震災遺構大川小学校は、北上川の河口から約3.7km内陸に位置しており、ここまで津波は襲ってこないだろうという先入観に偏った判断によって、陸や川を遡上してきた津波で多くの児童や先生が犠牲になりました。このことから、あらゆる可能性を想定し、事前の備えの大切さを学ぶ場所として、日本国内外から多くの方が訪れています。高さ10m以上の津波が予想される場合は、川を10km以上も遡上する可能性があるため、海や川から離れ、遠くに逃げましょう。



石巻市震災遺構 大川小学校

また、先人の知恵として歴史の古い神社は津波が来ない高台や内陸部に建てられていることが東日本大震災後に次々と判明しました。震災後は津波が来なかったエリアに伝承碑や樹木が植えられるようになり、未来に伝える活動が各地で行われています。下の写真は、募金や地域住民の協力を得て、2013年当時の中学生の発案で建てられた「女川いのちの石碑」で、第一号は旧女川一中の敷地内にあります。そこには千年後の命を守るために津波到達地点より高いことを示し、「夢だけは壊せなかった 大震災」の短歌が刻まれています。また、最後に完成した現在の女川小中学校脇に建てられ、全部で21基あります。



女川の中学生在が建てた「女川いのちの石碑」
左が第1号の石碑
右が女川小中学校脇に建てられた第21号の石碑

